

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月12日)

授業者：〇〇

範囲：租税と財政

主な感想・代案

- 後半のアクティビティ・討論のための準備として、前半の説明があること（それゆえ、導入が長くなってしまったこと）はよく分かりました。授業者が準備をしていることは明らかにも、良く伝わってきます。説明に関しては、何とか効率的に教える方法を工夫したいところです。
 - 今日は、いつもと少しタッチを変えて話したいと思います。そもそも、前回の授業で、私が〇〇君にもう一度授業をやるように促した判断は適切と言えたのでしょうか。そこを皆さんと批判的に考えていきたいと思うのです。最後の模擬授業者ですし、そういうのもありかなと。
 - おそらく、〇〇君も意識しているように、これからの時代の社会科教育・公民科教育には、大きすぎるテーマ・ニーズが求められていくと思います。生徒主体の話し合い、生徒が社会問題と向き合う授業などなど。一方でインプットも行わなければいけない。当然時間数は限られている。
 - そういった場面において、導入でいかに授業への動機づけができるか、授業全体の見通しを立てられるかが生命線になってくると思うのです。おそらく、インプットをさせる部分は、今まで以上にスピーディーに効率よく教える必要がある。ICTを使っていいと思いますし、そういう時短的な意味でワークシートを使うのもありだと思います（そこでこぼれ落ちかねない学力保証問題の話はまた別の機会に話しましょう）。そういった効率化の一環として、「決して楽しくはなくても、このインプットは必要なのだ」と生徒に思わせる動機づけというか、必要感がとても大切になる。そこで必要感が感じられれば、多少の「退屈」なインプットも頑張れる。そういうこともあると思う。だからこそ、生徒主体で、対話的な授業をするからこそ、インプットに入る前の導入は極めて重要だと思うのです。そう考えた時、今回の〇〇君の模擬授業の導入は、「必要感」を感じさせるには不十分だったように思います。一方で、素材はすでにそろっていると思います。
- 私であれば、導入では税金を払うネガティブな感情をやや煽りつつ、「でも必要だよな、どうする？」と迫っていく導入を考えます。例えば、知っている税金を発言させた後、消費税に少し焦点を当てて、昔は消費税が無かった話をします。10%とゼロ%って全然違うよねと。で、じゃあ、どうやって使われているのだろうかというところで、救急車の問題を出す。批判されている事例を出しつつ、一方で、高額が払えないと使えないってどう？と。そこで以下のように言って、主発問を掲示します。そうすることで、インプットに少しは耐えられる構えができるのではないかと期待します。

人というのは、自分だけが損していると思うと、他者を批判しがちです。皆さんも大人になると消費税以外にもたくさんの税金を納めないといけなくなる。そういう意味で、税金の集め方・使われ方は社会の論争の的です。今日の授業の後半では、どういう税金の集め方が良いかを皆さんに提案してもらいたいと思う。そのために、授業の前半では、税金のあり方を考える武器となる知識を得てほしい。皆で今日一時間で、税金問題について深く考えられるように、一緒にがんばろう。

【コラム】理論と実践の接点

学ぶ意義を示すものとして、「レリバンス」という言葉が最近流行りつつあります。要するに、「これ学んで何のためになるの？」という問いに答えられるような意義を授業内で示せるかということに注目が集まっています。そういう意味で、何のためのインプットなのかが的確に示せれば、授業に対する生徒の向き合い方も変わるのではないかと私は思います。 【参考文献】田中伸（2017）「社会的レリバンスの構築と目指した授業研究の方略」『社会科教育論叢』第50集。